

自由記述による大学院ゼミのあり方に関する研究

教育心理学専修・相模健人

1. 授業の概観

教育学研究科学校臨床心理専攻臨床心理学コースにおける指導教員と指導学生のクローズドなゼミ形式の授業である課題研究、特別研究を対象に自由記述によるアンケートで授業研究を行った。1年前期の課題研究Ⅰでは各自毎週10編の文献(内2冊は本)を探して読み、レビューを行うことを課題とし、修士論文のテーマを決定することを到達目標とした。続く1年後期の課題研究Ⅱでは集団ゼミを行い、修士論文の研究計画を立て、序論を完成することを到達目標としている。2年の特別研究では個人ゼミを行い、修士論文を完成することを到達目標としている。本年は2人の院生を対象に開講しており、週1回1時間を基本としながらも受講生の希望や全体の進度により、長期休み中または週数回ゼミを随時行った。

2. 授業評価法

①調査対象 教育学研究科学校臨床心理専攻臨床心理学コース大学院生2名。男性1名、女性1名。内1名は1年前期期間に他のゼミより移動してゼミ生となった。

②調査時期 2011年1～2月

③調査方法 自由記述による調査用紙をメールにより依頼、回収した。調査項目は8問である。「2年間のゼミを振り返っての率直な感想をお書きください」、「修士論文を作成する上で、ゼミが特に役立った点はどのような点ですか?」、「シラバスの到達目標が達成できた点、できなかった点を教えてください」、「ゼミの頻度、回数に関して思うところを書いてください」、「出来上がった修士論文について感想を教えてください」、「ゼミの改善点を教えてください」、「その他ゼミについて自由にお書きください」という質問について自由記述にて回答してもらった。

3. 授業評価結果

以下2名の回答を見ながら考察を行っていきたい。

最初の2年間のゼミを振り返っての率直な感想をお書きください」については「最初はゼミ生が一人になってしまうのかと思っていたが、結果的に二人になったことはより多くの視点から研究を

進めることができたので良かった」と言った当初はゼミ生が一人であったことを不安視していたが、新たにゼミ生が加わることでゼミを進めるにあたり多様性が得られたことを評価している。この点についてはもう一人の大学院生も「ゼミ変更の際にも快く受け入れてくださったこと・・・本当に感謝しております」と書いており、ゼミ変更が円滑に行われたことも評価されているようである。またゼミ内で「気を使うことなく、常に全力で接することができたのも、メンバーに恵まれて、幸せだったなあと思う」とゼミ生間、教師-大学院生間の関係が良好であったことも大学院生が修士論文作成に集中できる一因であったと考えられる。ゼミについても「ゼミ中には、細かい部分まで行き届いた指導をしてくださりありがとうございます」と感謝する記述も見られ、一定の評価は得ているようである。他にも「こちらからの急なお願いや、突然のゼミ日の変更等にも柔軟に対応していただけて、本当に助かりました」と柔軟にゼミを行ったことも評価されているようである。

続いて「修士論文を作成する上で、ゼミが特に役立った点はどのような点ですか?」については、「M1の時に読んだ論文の要約や、全体的なゼミの進度速さは、非常に助かりましたし、とても役立ったと思います」といった1年前期に毎週10編の文献を読む課題は評価されている。これについてはもう一人も「ゼミの課題が常に明確に指示されているため、1週間の目標がはっきりして取り組みやすかった」とゼミの課題が明確であることが評価されている。ゼミの進度については「早め早めに進めるやり方も、後々自分が楽になれたので良かった」や「私の場合は、修士論文の出筆と平行して就職活動をしなければならなかったので、M1の時に早めにやっておいたことで、M2になってからもなんとかその両方を乗り切ることができたように思います」といった少し早めに取り組むゼミでの姿勢が、大学院生の就職活動とも絡めて評価されている。

「シラバスの到達目標が達成できた点、できなかった点を教えてください、については「できなかった点は無いと思います」や「調査を先に行ったため、課題研究Ⅱの段階で序論は完成していなかったが、結果的に期限内には修士論文を完成し

ていたので、達成できている」と基本的に達成されていると大学院生は考えていることが分かる。後述した大学院生は研究の進行上、調査、分析を1年後期に行ったため、序論については2年前期当初に書きあげたため、修士論文作成の全体の進行に大きな影響はなかったと考える。むしろ、「それらの到達目標を達成しただけでなく、それ以上にスムーズに修士論文の作成は進んだと思います」と評価する大学院生もいる。

「ゼミの頻度、回数に関して思うところを書いてください」については「初期のゼミでの1週間10本は正直辛かったが、そうでもしないとあれだけの文献を読むことはなかったもので、毎週のゼミはありがたい」とまず1年前期の毎週10編の文献を読む課題を評価している。この課題については序論作成や研究テーマについてしっかりと決定できるよう行っているが、それ以前にしっかりと文献にあたって学習する癖をつけることに筆者は主眼を置いている。そのことが大学院生にも理解されており、その上でそれ以降のゼミ活動がスムーズに展開し地得るのではないかと推測する。また、「ゼミの頻度は週1回ということでしたが、この頻度がちょうど良いように思います」と答え、週1回であることを評価し、加えて「臨機応変にこちらの希望に対応していただけたことを大変感謝しています」と必要に応じて柔軟にゼミを行うことが評価されている。

「出来上がった修士論文について感想を教えてください」については「まだ発表会が終わっていないので、なんとも言えません」と答えているが、「修士論文の内容そのものとしては、中に誤字脱字はあるとは思いますが、教授の方々から見れば、まだまだだとは思いますが、現時点の私に作るものとしての、満足のできる、納得のできるものが出来上がったと考えています」や「単純に達成感」と大きな満足感を感じているようである。また1名の学部から指導を継続している大学院生については「ページ数が多くなる自覚はあったが、実際にすべてをつなげて総ページ数を確認したときに、2年間というよりも、学生時代の6年間の集大成だと感じた。卒論、修論のテーマは高校時代からの自分のテーマだったので、それが完成したことの喜びと、これからも自分の中のテーマとしていきたいなという決意になった」と答えており、自らに沸いた疑問を研究姿勢としてしっかり身につけ、論文として大成し、これからも実践していこうとする姿勢が見られる。

「ゼミの改善点を教えてください」については2名とも「あのままで良いと思います」、「このやり方で満足しているため、特になし」との記述で

あり、改善点としては大学院生側からは特に提案はなかった。

最後に「その他ゼミについて自由にお書きください」については、「他のゼミの話も聞いていても、やっぱり相模ゼミに入ってよかったなど常々思っていました。終わった今でも、自分の選択は間違っていないと感じています」や「あ、相模ゼミで良かったです」とゼミを評価してもらっているようである。他にも「文句を言ったりして、迷惑掛けることが多々あったとは思いますが、無事修論が完成したのは相模先生のおかげです」、「6年間、ゼミに入ってから4年間お世話になりました」、「ありがとうございます」といった感謝の言葉があり、全体的にゼミとして評価されているようである。

4. まとめ

以上、大学院生の回答からはゼミとしての運営として週毎の適切な課題、早めに進行していくこと、週1回を基本としながらも進度により柔軟なゼミ実施といった点が評価されており、現状で評価されているようである。しかし、今回は大学院ゼミ2名のみ結果であり、今後数年重ねての研究が必要と考えられる。筆者はこれらの結果をまとめ、また研究を継続したいと考える。

(付記) DP 関連追加質問について

大学院であるため、そのままの教育学部 DP をあてはめるのは無理があるが、参考のため学校教員養成課程を参考に記入してもらった。以下2名の結果を併記する。

DP1. 「教科・教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している。(知識・理解)」は3、3であった。

DP2. 「学校現場で生じているさまざまな教育課題について論じ、適切な対応を考えることができる。(思考・判断)」は3、4であった。

DP3. 「子どもの発達に応じた授業の構成や教材・教具の工夫ができ、個に応じた指導や説明ができる。(技能・表現)」は3、3であった。

DP4. 「実践を省察し、自己の学習課題を明確にし、理論と実践を結びつけた学習ができる。(関心・意欲)」は3、4であった。

DP5. 「教職に対する使命感や責任感を身につけ、教育的愛情を持って児童・生徒に接することができる」とともに、多世代にわたる対人関係力を身につけ、社会の一員として適切な行動ができる。(態度)」は3、3であった。

以上の結果から全般的に向上していると考えられる。